課題1−4資料　身のまわりの小川や沼の水質調査をしてみよう

手賀沼や印旛沼のような湖沼も里山のように農業，漁業など人々の生活と密接に結びついていました。かつて，手賀沼・印旛沼周辺の農家では，船でセキショウモ，コウガイモなどの沈水植物を採取していました。これをモク取りと呼びます。採取した沈水植物は，乾燥させて畑の肥料として利用されていました。湖水が澄み，豊富な水生植物の繁茂（はんも）が見られたころのことであり，昭和 30 年ごろにはほとんど行われなくなりました。

現在の手賀沼の風景

手賀沼は昭和 30 年ごろまでは泳ぐことができました。今では考えられない光景です。また，このころは数万のカモ類がやって来て，手賀沼で冬を越していました。カモ猟も盛んで，様々な猟法が受け継がれていました。

手賀沼流域は首都圏のベッドタウンとして開発が進められてきました。手賀沼流域の人口は，昭和 30 年代の109,900 人に対し，最近では 479,000 人（平成10 年）と 4 倍以上に増加しました。また，昭和 21 ～ 43 年に実施された干拓事業により，沼の水面積は干拓前に比べ，約 60%にまで減少しました。

人口の増加に伴い，昭和 30 年代には流域の約 9 割を占めていた保水機能が高い山林や水田，畑が現在では 5 割以下まで減少し，市街地・宅地が昭和 30 年代に比べ現在では 4 倍に増加しました。

平成 12 年から北千葉導水事業が始まりました。利根川の水を手賀沼に入れ，その後，江戸川へと水を流す役割には，①浸水被害からまちを守る，②くらしに必要な水の確保，③手賀沼等の水質の浄化の３つがあり，くらしを支えています。

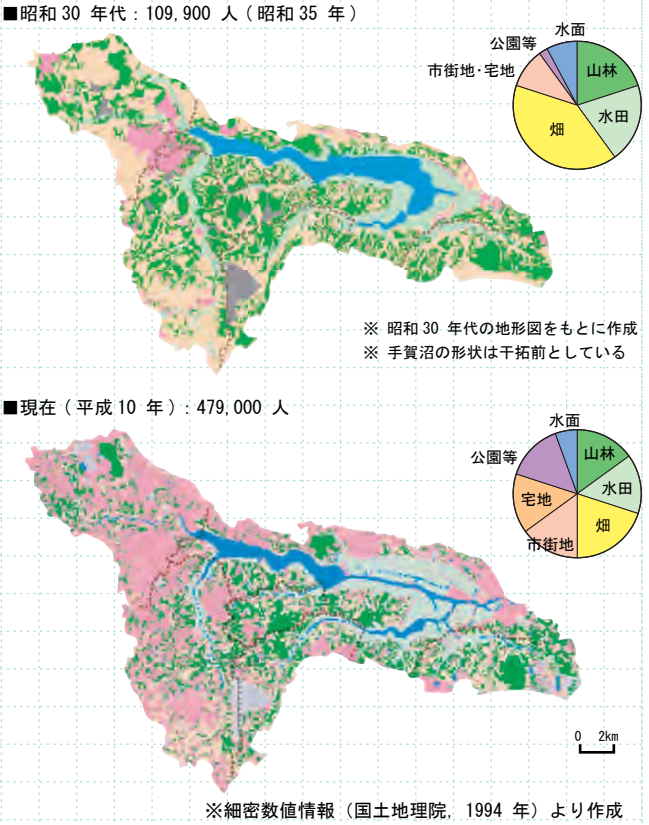

図　手賀沼流域の社会環境の変化
手賀沼水循環回復行動計画（平成 15 年 7 月千葉県）より

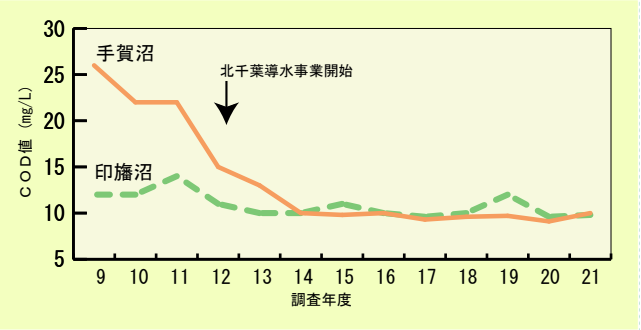

図　手賀沼・印旛沼の水質汚濁（COD 値）の年変化
千葉県環境白書より印旛沼（上水道取水口下）及び手賀沼（手賀沼中央）の 75% 値を示す。